

大村海軍病院



被爆惨状絵図 23号

「私の大村海軍病院日記」

昭和20年8月9日、長崎市竹久保町3丁目の自宅において被爆、首から胸にかけて負傷して、近くの防空壕に逃げました。そして、その防空壕において終戦の日(8月15日)から、3日ばかりたった。

昭和20年8月19日頃だったと思います。

現在の飯盛町である、江の浦の伯母の家に逃げて行き、そこで近くの医師にかかり、治療を受けておりましたが、傷口が化膿して、だんだん悪くなって行きました。

そのとき、佐五保鎮守府の 杉山 六蔵 閣下が知り合いだった為、杉山 閣下が自動車と私の家へ差し向けて載せ、大村海軍病院に入院しました。

その日は恐らく8月末日であったと思いますが重病の為、はっきり判りませんでした。

そのときは、危篤状態であったのは、治療が十分でなかった為でした。

私は、特別な配慮で入院のため、病院当局はベストをつくして頂きました。

9月になってから数日たって、米軍が持って来たペニシリンを始めて打って頂き、あれほど化膿していた胸部が、10日周もすると

すっかり治りました。

そして、12月末日、大村海軍病院を退院しました。そのときの治療の場面を絵にかけました。

② 証言者

被爆当時の住所

長崎市 竹之久保町 XXXXXXXXXX

山本 帝子 主婦

(大正13年1月26日生)

燦心池から1,400米の被爆で胸部を負傷



## 被爆惨状絵図 24号

### 「防空壕でのお友達」

この場面は、原爆投下から10分位してから、竹之久保町の町内防空壕です。

そこに私が着いたときは、既に25名前後の人が避難しておりました。

皆さん うめき声をあげたり しっかりせろと励めます人もありました。

私のお友達も、この防空壕で亡くなりました。51年も過ぎたので、近所の人でしたが名前も忘れまして。

恐らくこの防空壕で生きているのは、私ひとりだったと思います。今もこの人達の冥福を祈っております。

◎ 証言者

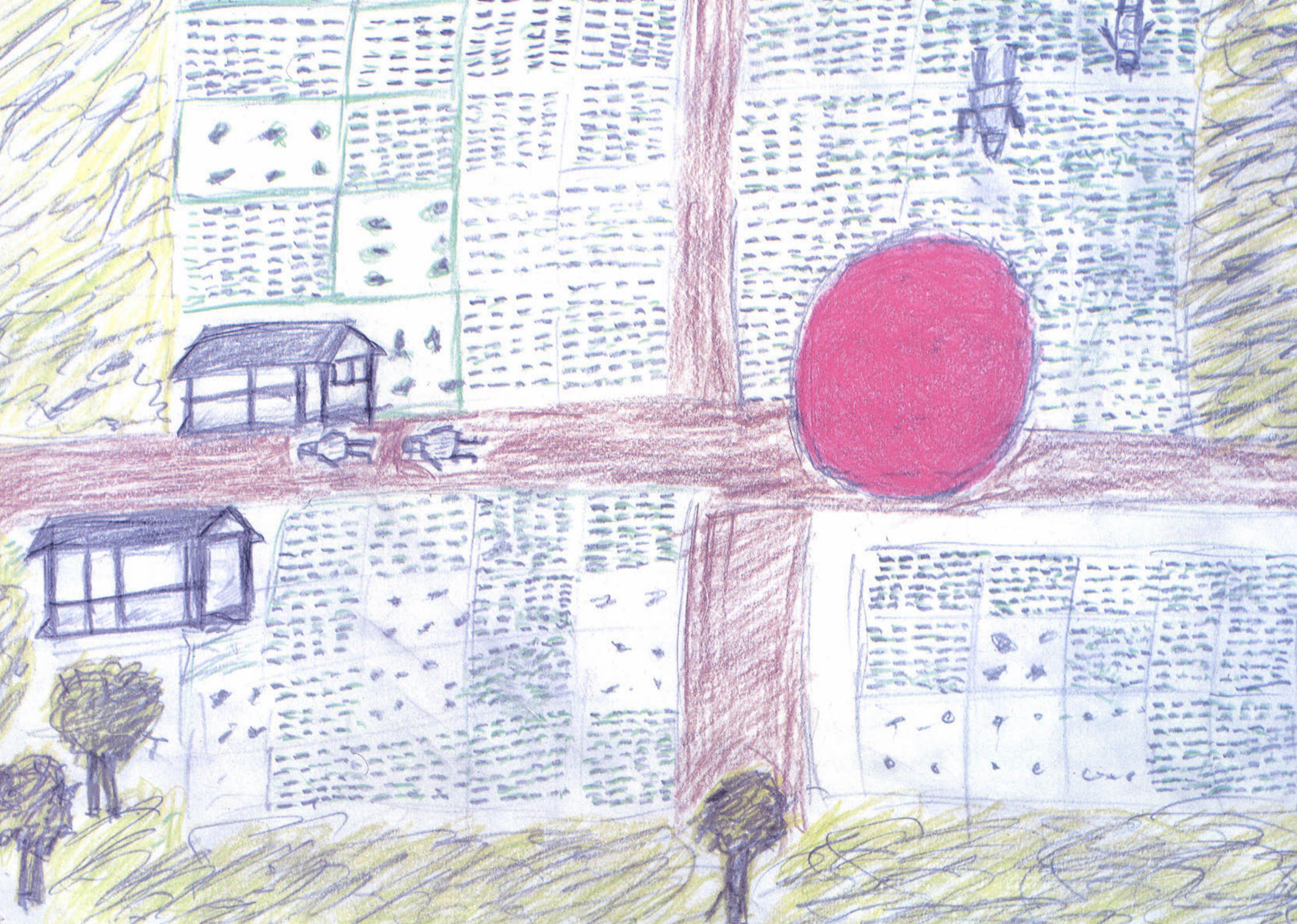
### 被爆当時の住所

長崎市 竹之久保町 [REDACTED]

山本 帝子 主婦

(大正13年1月26日生)

爆心地から1,400米の被爆で胸部と貞場



## 被爆惨状絵図ヲ25号

「アラ……!! 太陽が落ちた!!」

この場面は、昭和20年8月9日午前11時頃、私は御船蔵町の建物政用によって三重町に政用していたため、浦上駅前郵便局と、大学病院へ治療のため次女、洋子(1才)、長女、富美子(4才)の用件をすまして、帰途、滑石町横道の酒屋(千代鶴)の前で、目の前に真赤な太陽が落ちたようでした。

そして私は2米ばかり吹き飛ばされたのでした。

(小島カノ証言)

私は、8月9日の爆撃がこわくなり、長久、百里野の実家へ逃げておりました。そこで実母が田の草を取るので、田んぼに出かけたので私もついて行きました。

それが8月9日の午前8時頃でした。ところが午前11時頃、まるで真赤な太陽が、目の前に落ちました。

それから爆風が来て、田んぼの中の私も倒れそうでした。

近くで、田の草を取っていた母が、「いまのは、なんか!!」と云って、私のところに寄って来ました。

それから10分もたったら、裸の人が火傷したり、負傷した人が、<sup>せき</sup>道<sup>の</sup>尾<sup>方</sup>面<sup>か</sup>ら、逃げて来ました。

それは、正に地獄でした。

(水江オケ証言)

長崎原爆においては、直径数百米の火球が、6000度の熱をもつて爆発したと云われております。

ところがこの火の玉を見た人は、ごく僅かな人であったと思います。私は(深堀 勝一)爆心地から、1300米の地点での被爆でしたので、その火の玉は見ておりません。

それは何故か、自分自身はその火の玉の中にいたので、見てはいなかったと思います。

そこで、爆心地から3300米の被爆でした。水江さんは、その火の玉から、ちょっと離れたところにいたからだと思います。

ところが、3300米離れた人がすべて火の玉を見たわけではなく、北部方面で、3000~3500米附近の人が火の玉を見たと思います。

◎ 証言者

水江オケ 長崎市 御船蔵町

小島カノ 長崎市 三重町 角上



## 被爆惨状絵図オ26号

### 「五輪橋の上で」

この画面は、昭和20年8月9日午前11時7分から10分、  
原爆投下から5分ばかり経過してからのことでした。

私は、三菱製鋼所中ノ工場で働いておりました。

私は、原爆が投下されてから自分は負傷していないのに気がき、  
この工場から速く逃げないと危ないと工場の外に出て、五輪橋  
の上へと逃げて来ました。

ところが、橋の上で、会った人数十名が着ていた服がぼろぼろと  
なっており、ひどい人は裸でした。

そして、顔を見ると、皮フがはれあがって、両うでは小り袖のように、  
たれ下がっていました。

そして、途中で倒れた人もありました。

私はこの夜の中で、一番ひどい光景を51年後の今日まで忘れる  
ことが出来ません。

◎ 証言者 石原 公明

長崎県西彼杵郡西彼町下岳郷

被爆当時（15才）三菱製鋼の養父

追伸、五輪橋は、現在M.C.Cから

梁川町に渡る橋です。

昭和のはじめ頃は、5厘を交わって、この橋を渡っていたそうです。



## 被爆惨状絵図 第27号

### 「手足が震えた友達のお墓」

一番左側に並んだ二つの遺体は私の同級生で、近所に住んでいた親友の京子ちゃんと洋子ちゃんです。

当時12歳の私は爆心地から500メートル離れた城山町で被爆しました。

京子ちゃんを見たのは原爆投下直後で防空壕のそばでした。

「みっちゃん、みっちゃん」と呼ぶ京子ちゃんは体中真っ黒焦げになり服は焼けてしまっている状態で当日亡くなりました。

私は涙をふきふき、そして震える手足を動かして土葬を手伝いました。

「この絵は、実は一部が空想なんです。

別々に埋められた二人を一緒に書きたかったし、裸のままですくった京子ちゃんに服を着せてあげたかったのです」。

私は今でも毎日、「水を飲みたい、飲みたい」と言いながら死んでしまった京子ちゃんのために、仏壇に水を供えています。

### ◎ 証言者

大塚 美智子 (73才)  
(昭和7年5月3日生)

#### ・ 当時の住所

長崎市 城山町 [REDACTED]  
(純心女学校1年生)



火

水

陽にジリジリと照つけられ、腕から汗が滴り、体が熱い。一匹のおちんちんは、体の木の下に隠れている。

被爆惨状絵図ヤ28号

「私の従妹 徳永 りょう子さんも死んでいた」

私の従妹 徳永 りょう子さんは、私が 8月10日朝、  
自宅に帰って見たら、既に死んでおり、うじ虫がわいており  
ました。私の妹 永田 千里も特に同じ年令で仲良し  
でした。徳永さん一家は、父、母もどこで亡くなったか  
判らず、その為、その処置は私の父と近所の人などが協力  
して土葬しました。

このような人が、近所にたくさんおられました。

◎ 証言者

永田 マツエ

・ 当時の住所

長崎市 城山町

市は城山のたんぼの草取りは一さかしに行つた時は 着物はふさと 身体はただ地股はタイコのように

ふくれていました 田の水はお湯のようにわいていました。



被爆惨状絵図キョウ号

「私の姉はたんぼの中で死んでいた!!」

この画面は、私の家の猫のひたい程のタンボがあり、この日も姉が稲の田草を取るために、1人近くのタンボに出かけておりました。

家に帰って来たが、長女がいないので、タンボにさがしに行つて、タンボの中に仰向きになって死んでいた、長女を発見しました。

見ると、顔面はすっかりはね上り、身体全体もパンパンするように大きくなっていたそうです。

そこで、タンボから、引張つて来て、わが家の前に寝かせたそうです。

◎ 証言者 永田 マツエ (71歳)

長崎市 峰ヶ丘



## 被爆惨状絵図中30号

「原爆投下機に対して

対空砲火陣は、<sup>ただ</sup>唯、沈黙していた。」

この画面は、稲佐岳高射砲陣地に、私どもが長崎商業4年生のとき、即ち昭和17年に軍用道路建設のため、動員されたときの状況でした。

同陣地には、高射砲が4門配置されておりました。

射程距離が2800米とのことで、そこには、100名ばかりの兵隊が駐屯しておりました。

又、中隊長が、福田さんという人で、私ども長崎商業出身の人で背が小さい人で、自宅は、長崎市御船蔵町だそうで、自分の弟も長崎商業3年に在学中であると云っておられました。

それから間もなくして、B29による灰都、佳林から出撃で夜間爆撃があり、大浦方面に焼夷弾が多数、投下された後で、軍関係の情報筋から聞いたことでしたが、あのときの長崎の対空砲火は優秀で、うっかり長崎空襲には、行かないと米軍が云っていたそうです。

長崎市周辺には、重要な要さい都市のため、稲佐岳、神の島、鍋冠、金比羅、中の島、家野町、高部高台、こしき岩など

高射砲陣地  
10ヶ所程度の高射砲陣地、高射機関銃陣地がありました。ところが、昭和20年8月9日原爆投下機が、島原市方面から長崎市方面に侵入して来た際、対空砲火陣が、発砲せず、ただ沈黙していたそうです。

8月9日のB29は、おそらく高度3000米から4000米のだったろうと、推測されます。

雲の切間から、長崎市がはっきりあいたので、その時のこと、城山国民学校で見ていた土岐 恵美子さんは、東の方から、爆音がしたので、敵機だろうかと思索していたそうで、だんだん近づいて来たら、落下傘がスルスルと落ち、それがピカッと来たそうで、対空砲火のノ発も打たなかったそうです。

例えば、金比羅山陣地からすると、高射機関銃の射程距離に入っていたと思われるのですがあとで、金比羅陣地の兵士に聞くと、報復攻撃が恐ろしかったので、発砲しなかったそうです。

何たることでしょうか、長崎市民は、その下で真面目に切らいて、いたのですから-----

### ◎ 証言者

- 土岐 恵美子 (67歳)  
長崎市 油木町 [REDACTED]
- 深堀 勝一 (68歳)  
長崎市 坂本 [REDACTED]



## 被爆惨状絵図 ㊦ ㊦ ㊦

「アラッ! 落下傘が落ちて来る!」

この画面は、昭和20年8月9日午前11時頃、金比羅山と、ごっぺん山の上空を長崎市へと爆音がして、B29と思われる飛行機が見えて来た。

次の瞬間するすると落下傘が降下して来た僅か救済の時間でした「アラッ、落下傘が落ちて来る」と、私は叫びました。

ところが、ピカッと光って来た、それは成山国民学校の2階でした、そこで私と本多博子さんは打ちのめされました。

後で考えてみると、あれくらいのところまで高度を落して来ているB29に どうして、対空砲火は1発も打たなかったのでしょうか

◎ 証言者 ・ 土岐 えみ子 (17才)

県立高女報国隊

・ 本多 博子 (15才)

女子商業報国隊

追伸、そのときのラジオは、「敵機ノ機島原半島を西進中なり」

と、放送したと、土岐えみ子さんが云っておられました。

そして、一機ならたいしたことないと、友達と話し合ったそうです。



勤勞部



## 被爆惨状絵図 才32号

「原爆投下2ヶ月前に原爆の講習会が」

それは、昭和20年6月の梅雨晴の頃でした。

私ども、三菱兵器大橋工場勤労部の前庭の芝生の上で、昼休升(12:00から12:45)をしていた時のことです。

当時、三菱兵器大橋工場には日本で最高水準にある青年技術将校が20名程配属され、各種新兵器の研究が、急ピッチで進められておりました。

「おい中学生集まれ」と云う号令で、私ども動員学徒の中学生が40名程度が集合しました。

ところが、何をやるのだろうか？ 私どもは、いびかっていたのでした。

講義の内容は、今日の新兵器についてでした。

だんだん話が進んでくると原子爆弾に及び、原爆の原理が詳しく説明され、私どもにもおぼろげながら、理解することができました。

そして、今日の状況では残念ながら、アメリカが一番進んでいて、実用の段階まで来ているとのことでした。ところが

私どもは、この原爆の被害者才ノ手になろうとは、

知るよしもなかったのです。

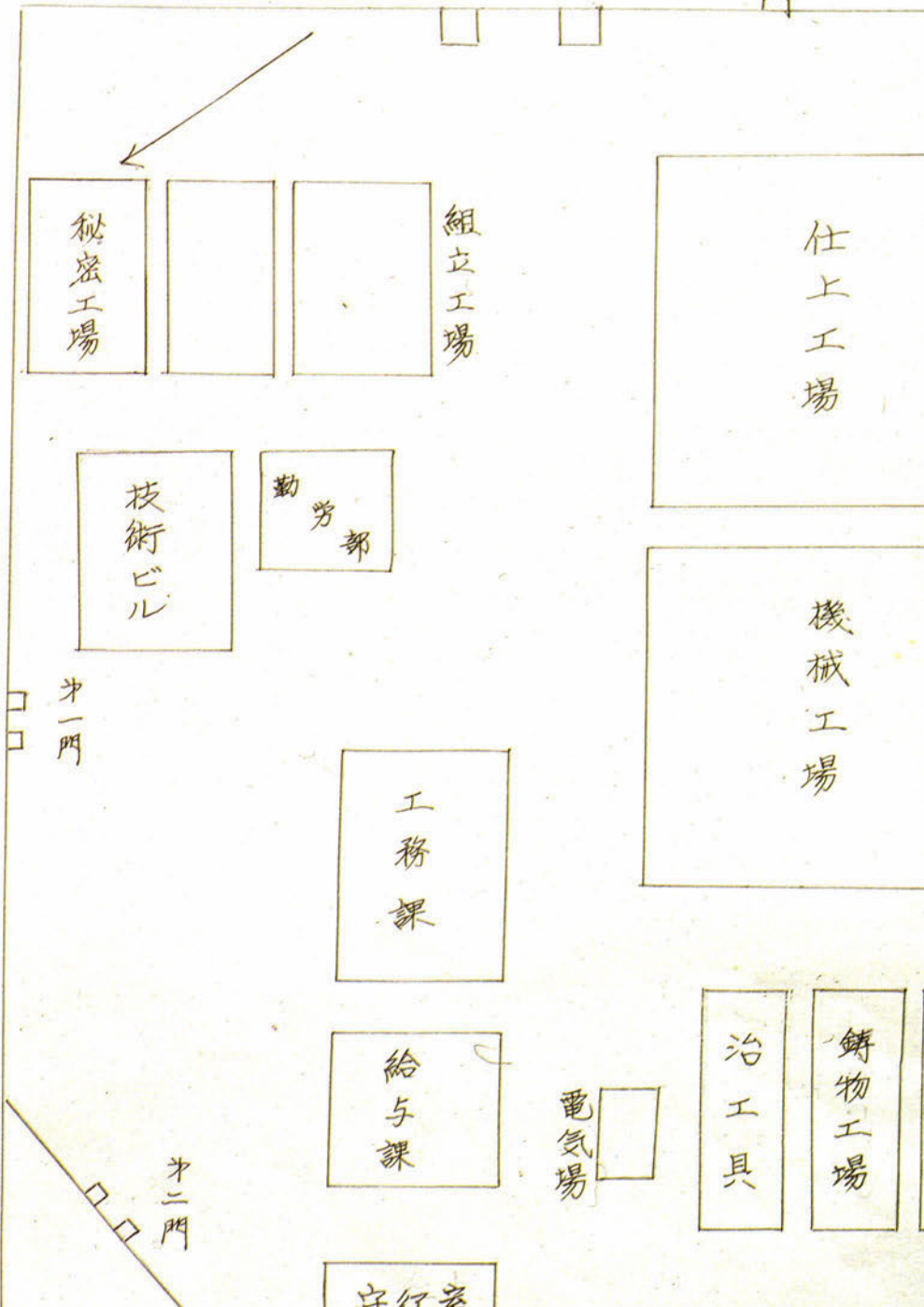
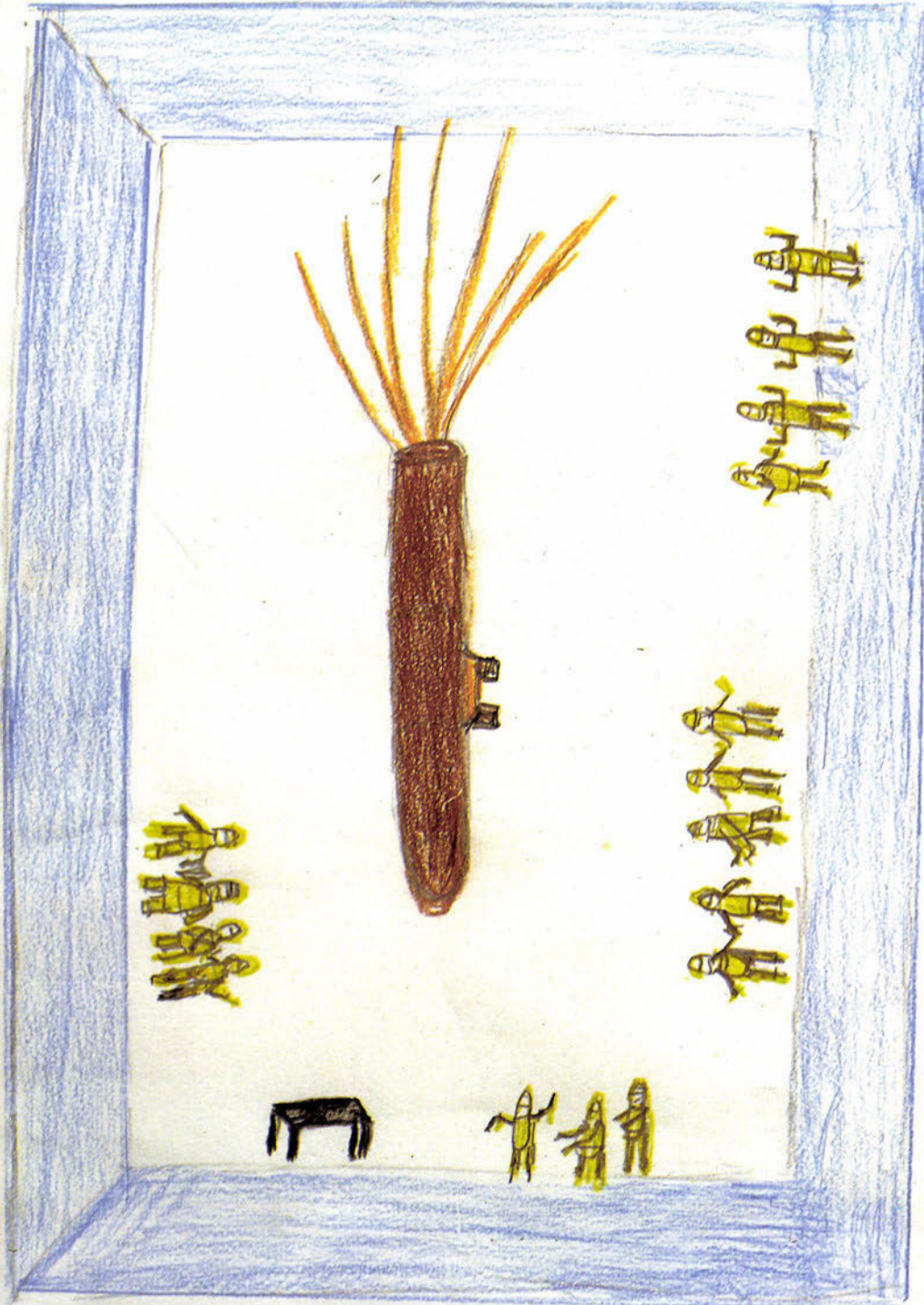
私は、8月6日に広島市に新型爆弾が投下された日の夕方、ソノ光の本原町丁目の母の実家において、弟博から聞いた時、  
「あっこれは原爆だと、弟にいました。

その弟も3日後8月9日の原爆により死んだのも何かの因縁だったと、今も思っております。

◎ 証言者 深堀 勝一

三菱兵器大橋工場の略図

オ三門



## 被爆惨状絵図オ33号

「ドイツ、VI、VIIの

ロケット兵器実験が長崎で」

昭和20年の4月頃でした。三菱兵器大橋工場の秘密工場で、当時、ドイツ空軍が、英国本土を攻撃していた、無人飛行機VI、VIIの記事は、毎日新聞にのっておりました。

それは、新兵器でイギリス、アメリカ、フランスなどの連合国を大いに震えあがらせた兵器でした。

ところが、そのロケットの噴射推進実験が、三菱大橋兵器工場の秘密工場で実験されることを聞いた、私ども数人の動員学徒は、その現場にのりこんでいきました。

刑務所のへいのようなものを(高さ5米程)のりこえて、画面にあるような恰好で見学をしました。

本来ならば、叱られて追放されるどころであったが、新兵器開発の技術将校は、ただ黙認していました。

そこは、150坪程のコンクリートで周囲をかこまれておりました。

なかにはロケットが直径50cmの筒で6米ばかりの長さでした。実験が始まると、噴射推進の音が、耳をつんざく程のものでした。

戦争末期には、相つぐ敗戦の報に、国民の大多数は、新兵器発見をこころ待ちしていたときのことで、見学していた私どもも大いに期待しておりました。◎証言者 深堀 勝一(69歳)

## ◎ 追跡記事 (被爆惨状絵図オ33号)

あのロケットは、ドイツ政府が同盟国の戦力増強のために潜水艦によって、インド洋上に運び、日本潜水艦に引渡したものであると聞いております。

そしてあのかの立会人が、技術将校15名で原爆のとき一番南側の技術ビル(爆心地から距離1100米)にいたため、全員が爆死したと思われます。

あの光景をみたもので、平成8年(51年後)の今日、生き残っているものは私(茶壺)1人であると思います。

なお、この絵を見た村崎圭子さんが私の兄も立会人であったと、兄から聞かされました。

村崎さんの兄さんは、東大工学部卒の青年技師でした。



6

22f

12f

2014年 10月

## 被爆惨状絵図 才34号

「 昭和20年8月1日、B24、B25による  
長崎大爆撃」

私は、その日、8月1日は、動員による疲れで、三菱兵器大橋工場を休んでおりました。

お昼過ぎのことではなかったかと思いますが、空襲警報がなり、やがて敵機襲来の鐘が鳴ったようでした。そこで私は、家の中の防空壕に入りました。

しばらくしてから、外庭に出てみると長大医学部の学生が、グビロケ丘の体育館の前にたむろしていた学生20名程の人が、急に山の手の防空壕に駆けて行きました。

これは危いと、大学病院の上空をみると、画面のような光景でした。B24、B25の8機編隊が、頭上に来ておりました。そこで、私は防空壕に入ると、すぐに爆弾が、だだだだ、と、投下されました。

非常に近い場所に投下されたと思いましたが、それは防空壕の四隅がくづれて砂ほこりがしました。

それから、1時間ばかりの間 つぎつぎに編隊爆撃がありました。

爆撃の終了後、外に出てみると、わが家にも大きな穴があつていくつかやられ大破しておりました。

私の家から20米ばかりのところに250Kの爆弾が投下され、10米の大穴があいておりました。

その日の午後3時頃、姉、母が家に帰りつき無事をよろこびあいました。

午後5時近くになって、弟が学校より帰って来て、皆が無事であったことをよろこび合つて、家族のきづながこころにまで、強いのかを知りました。

その日の長崎市の死者2000名、負傷者5000名とか、人が云つてゐるのを聞きました。

その後、わが家は、疎開先と母の実家にしようか、姉が長崎に予約していた家に行こうかと、迷つていたが結局、母の実家である長崎市本原町ノ丁目20番地の家に疎開したのが3日後のあとのときでした。前記のように、長崎市内においては住居の移動が激しくなり、長崎市外に流出したもの、ちよつとした民族の大移動のように8月2日より、8月9日までは、引越荷が、道路をあふれた感がありました。

なかには、決の町の人々が、浦上の方に引越して来て、原爆によつて爆死したものがあり、運命のときの人も多数いたわけでした。

◎証言者 深堀 勝一(68才)  
長崎市 坂本

### 参考>

皆さま、爆弾が空中より落下する音をご存知にはならないでしょう!!

私は、昭和20年8月1日、B25、B24による編隊爆撃を受けましたが、1時間半ばかりの反復攻撃でヒューンヒューンという無気味な音で、そのとき私の近く20米にも250Kの爆弾が落ちたのです。

◎証言者 深堀 勝一(68才)  
長崎市 坂本  
長崎県被爆者年帳友の会会長